

1 写真所有者、撮影に至る状況等

(1) 写真所有者

- 所有者は、丸山順子さん（旧姓は松本さん・87歳）熊本市北区..
敗戦時で丸山さんは碩台国民学校4年生、実家は藤崎宮近くの小児科院。ご主人は、陸軍軍医学校卒業後に、若くして軍医を勤めていた。
- この証言内容は、熊日新聞平成元年8月連載「セピア色の夏 碩台国民学校生の戦後」に、8月23日「白いハンカチ」として、紹介されている。

(2) 写真撮影に至る状況

- 6歳の時より日本舞踊を、菊池郡菊陽町の鈴木筆子さん（写真1では甲冑武者姿の中央。右隣は娘さん、左側は弟子）に学び、父親友人（外科医）の和田さんと娘さん・和田素子（現姓志垣さん）と数回、菊池神社に拝殿した後に、隈府市内の特攻隊宿舎に「踊りの慰問」に出かけた。
- 写真1はその慰問時のもので、写真2は菊池神社拝殿前のものである。
- 慰問先での写真1では、三人の子供中央が当事者の丸山さん、右側が友人の和田さんである。また、菊池神社社殿前の写真2では、最上段の子供列の右から3番目が丸山さんである。
- 数回行った慰問では、踊りや歌・詩吟で南朝方の菊池氏を顕彰する創作舞踊「菊池尽忠記」「尽忠 菊池一族」等が定番で、自分たちは子供踊りを行った。
- 慰問後、出撃日には部隊全機が、藤崎宮近くの自宅上を数回旋回して、銀翼を輝かせて南に向かった。丸山さんは白いハンカチを振って両親と一緒に見送った。

(3) 写真の戦後

- 短冊を手に持った2枚の写真は、慰問時にお礼としてもらった「6枚の短冊」を、50歳後半頃に写したものである。
- 慰問時に、6枚まとめて持参され、他の方々ももらわれたのではないか。
- その後、短冊は供養のためお寺で護摩に伏した。
- 短冊文面は「純情 岡村中尉」「来る年も来る年も 咲きて匂えよ 桜花 われ亡きあとも大和島根に」「必沈〇〇」などである。



写真3・4 丸山さんと慰問時にもらった短冊 平成元年頃に撮影

2 撮影された振武隊の特定

(1) 振武隊の特定

- 写真1では、写真中央部踊り師範の3名から右側の振武隊員9人、民間人2名（丸山さん・和田さんの父親）、和田さんの右側グループと丸山さんと少女2名と振武隊員11名、民間人1名の写真位置である。
- 振武隊の編成標準は12名であることから、2個部隊の集合と想定した。さらに短冊記銘の「岡村中尉」から、該当者は「第76振武隊長の岡村博二中尉」を特定し、出撃記録日が重なる第77振武隊との合同部隊であると判断した。



写真5 加古川飛行場での第76振武隊。4月18日以降の撮影。ここでの隊員は11名
『特別攻撃隊の記録 陸軍編』光人社より

- 写真1の右側部が「第76振武隊員」で、中央部で和田さんを抱きかかえているのが、岡村隊長である。
- また、写真左側が「第77振武隊員」であるが、詳細は別途報告する。

(2) 部隊員、特攻攻撃

- 第76振武隊は、昭和20年4月、第五十一教育飛行師団を持って編成された。第六航空軍付(九州)で、**部隊長は岡村博二(おかむらはくじ)中尉**である。
- 写真5で、前列左より山口慶喜伍長、境忠軍曹、岡村中尉、木村廣秋少尉、垣尾幸男伍長。後列左より小島英雄伍長、中川芳穂伍長、鈴木啓之伍長、長谷川武弘伍長、久富基作少尉、戸沢政雄軍曹。後方は同部隊装備九七式戦闘機で、**尾翼に数字の「7と6を組み合わせたデザイン」の白い部隊マーク**が描かれている。
- 4月18日に本田保伍長は事故により殉職。その後、木村少尉、垣尾伍長は原隊に復帰する。
- よって**菊池での写真撮影時は、部隊員は9名**となる。
- 第五次航空総攻撃が行われた4月28日**、第76新部隊は岡村中尉以下、境軍曹、長谷川伍長、山口伍長、中川伍長、鈴木伍長の6名が、16時50分に知覧飛行場発進し、嘉手納湾の敵艦船に向け特攻攻撃を行った。
- 続く5月11日の第七次航空総攻撃では、久富少尉、戸沢軍曹、小浜伍長の3機が加わり、16時41分に知覧飛行場を発進、嘉手納沖の米艦に突入した。



写真6 知覧飛行場三角兵舎内での出撃前夜の第76振武隊 4月27日の撮影 『特別攻撃隊の記録 陸軍編』光人社より

3 まとめ

- 写真1の撮影は、証言等から隈府市内の地元豪志宅か旅館、菊池神社等と想定できるが、まだ特定には至っていない。撮影日は木村少尉・柿尾伍長が原隊復帰した以降で、知覧基地出撃前夜までの期間、4月18日～27日までとなり、部隊移動の日数を勘案すると、**4月25日前後の撮影**と想定する。
- 特攻隊の中継基地として利用された陸軍菊池飛行場では、**部隊名が確認された「初めての特攻振武隊写真」**となる。
- なお、知覧飛行場があった南九州市知覧町では、フィルドミュージアム整備の一環として、整備のための発掘調査が行われた「ほと地区の無蓋掩体壕」に、**本第76振武隊機のカラーリングを施した「九七式戦闘機(FRP製原寸大)」が屋外展示**されている。

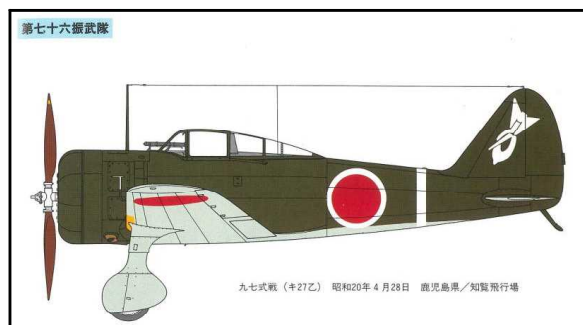


写真7 知覧飛行場の掩体壕屋外施設での第76振武隊展示機
写真8 部隊カラーリング 本機は隊長の岡村中尉搭乗機



写真1 隈府の慰問先での丸山さん方慰問団と第76・77振武隊員



写真2 菊地神社拝殿前での慰問団と神社関係者との集合

☆ 岡村 博二

大正11年4月27日生。広島県出身、広島高師付属中、広幼、予科2-3。11戦隊（満州の哈爾濱、戦闘）付士官候補生、航士6-4。明校（戦闘乙学）、戦闘操縦。陸軍中尉。

昭和18,11,20, 明校付。

- “ 19, 2, 20, 48戦隊付となり、近藤哲也、二瓶正喜、堀英男、山本武寿の同期生4名と共に、満州の延吉に赴任した。
- “ 19, 4, 29, 48戦隊は湘桂作戦参加の為、中シナ方面に出動したが、岡村中尉は、満州の部隊に残留したと察せらる。
- “ 20, 3, 1, 第6航空軍司令部（福岡）付、特別攻撃隊「第76振武隊」隊長。即日編成完結。装備は97戦12機。
- “ 20, 4, 28, 16時50分、岡村中尉以下6機の97戦の特別攻撃機は知覧飛行場を離陸し、沖縄近海洋上の敵艦船に体当たり攻撃を実施して散華。岡村博二の享年は、23年と1日。陸軍少佐に昇任。

『修武台精神』

『留魂録』雄叫び：「生を捨て義を執り、名節を尚び、廉恥を重んずる伝統的士風」、この大文字六十年の先輩が、血汐より発せられた雄叫。市ヶ谷台精神を離れては修武台の伝統は有り得るものでない。修武台精神は飽く迄市ヶ谷台上に於て、吾々の享けたこの伝統精神を根幹とし、之を延長し、更に之を一步推し進めたものでなければならぬ。

『遺詠』：いつの世も 国守るものは 若人の止むにやまれぬ大和魂

『支那大陸打通作戦参加、そして一転・沖縄の米艦船に突入散華！』

56期戦闘は明野の乙学終了時、195名が大別して作戦要員に136教育関係59と分けられた。前者のうち赴任戦隊等行く先の決まった者を除く71名は、明野本校・天竜等で更に技量の研鑽に勤め赴任命令を待つ事になった。その中に岡村がいた。彼が48戦隊付きになるまで略3ヶ月明校付きで居たわけで、技量向上はさぞかし目覚ましく、最新鋭戦闘機を駆っての自由奔放な自己訓練は、回を重ねる毎に大きな自信を生んだ事であろう。

48戦隊付きとなり、同期生4名と共に満洲・間島飛行場出発、4月末武昌飛行場着、部隊は第五飛行団に編入された。間もなく“大陸打通作戦・湘桂作戦発動さる。”爾後約一年、大陸各地で戦闘が続く、航空部隊は戦果を挙げつつも多くの損害もまた被らざるを得なかった。大陸の戦闘は終りが見えない。48戦隊の同期生5名は6-6近藤哲也、6-26二瓶正喜、8-8山本武寿といずれも戦死、堀と岡村の活躍は報ぜられていない。19年8月10日には明野教導飛行師団から中島欣也が着任、その後中隊長を拝命している。

20年3月1日付けで岡村は第6航空軍司令部付、特別攻撃隊長「第76振武隊」として重責を担う。即日編成完結、装備は97戦12機なりと。4月28日沖縄近海の米艦船に突入、少佐に昇任。戦力甲に成長している筈の岡村博二には“本土決戦・全軍特攻”の場で4式戦“疾風”を駆使して先頭を切って貰う筈では無かったのだろうか。

連絡先

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
個人携帯 090-1513-5528

Eメール

takayanagi912@yahoo.co.jp

HP URL

http://www.kumamoto-senseki.net/



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク